

ダニエル書 - 第四百七号

アメリカ政治の形成における宗教運動の役割：パット・ロバートソンから
クリスチャン・コアリションまで

Jeff Pippenger

2024-03-20

前回の記事は次の段落で締めくくりました：

「心霊主義を通して現される奇跡を行う力は、人間ではなく神に従うことを選ぶ者たちに対抗して、その影響力を行使するだろう。霊からのメッセージは、神が、日曜日を退ける者たちに自らの誤りを悟らせるために、彼らを遣わしたのだと宣言し、国の法律は神の律法として従うべきだと断言するだろう。彼らは、世界における甚だしい悪を嘆き、道徳の退廃した状態は日曜日の冒涇によって引き起こされているのだという宗教指導者の証言を支持するだろう。彼らの証言を受け入れることを拒むすべての者に対して、非常に大きな憤りがかき立てられるだろう。」『大争闘』589、590。

「日曜日の冒涇によって道徳の荒廃した状態が引き起こされている」という宗教指導者たちの証言は、アメリカ合衆国における太陽崇拜の強制へと至る歴史の道しるべである。アメリカのテレビ伝道師で、クリスチャン・ブロードキャスティング・ネットワーク（CBN）およびクリスチャン・コアリションの創設者であるパット・ロバートソンは、1988年の共和党予備選挙でアメリカ合衆国大統領選に出馬した。ロバートソンの選挙運動は、保守的なキリスト教徒の有権者を動員し、自身の福音派の信念に沿った社会的・道徳的課題を擁護することに焦点を当てていた。1989年の終わりの時に、最後の八人の大統領の最初の者の歴史において、クリスチャン・コアリションの指導者であり創設者が大統領選に出馬した。レーガンの大統領史は、最後の共和党大統領の歴史の典型となっている。

神の裁きがまさに、『大争闘』の前の一節を成就させ、かつクリスチャン・コアリションの働きと軌を一にするような環境を生み出そうとしている。クリスチャン・コアリションは、ホワイト姉妹が、政権の手綱を握る者たちには解決できないと指摘する道徳的・社会的問題に取り組むために生じたものである。レーガンの時代の歴史におけるクリスチャン・コアリションは、極めて近い将来に起こる同様の運動を表している。預言的に見ると、クリスチャン・コアリションは、1880年代から1890年代にかけてのブレア法案に関連した日曜法危機の折のナショナル・リフォーム運動によって型示されていた。ナショナル・リフォーム運動は1888年に結成され、ホワイト姉妹はその運動を著作の中で具体的に取り上げている。

神の民には大いなる危機が迫っている。世界にもまた危機が迫っている。あらゆる時代を通じて最も重大な闘争が、今まさに私たちの目前に迫っている。預言の言葉の権威に基づいて四十年以上にわたり切迫していると宣言してきた出来事が、今や私たちの目の前で起こりつつある。すでに、良心の自由を制限する憲法改正の問題が、国の立法者たちに強く働きかけられている。日曜遵守を強制するという問題は、国家的な関心と重要性を帯びた問題となっている。私たちは、この運動の結果がどうなるかをよく知っている。だが、その事態に備える準備はできているだろうか。人々に迫る危険を

警告するという、神が私たちに委ねられた務めを、私たちは忠実に果たしてきただろうか。

この日曜遵守の強制を推し進める運動に携わっている者の中にさえ、この行為のもたらす結果に目がくらみ、見えていない者が多くいる。彼らは、自分たちが宗教の自由を直撃していることに気づかない。聖書の安息日の主張と、日曜という制度が拠って立つ虚偽の土台とを、これまで一度も理解したことのない人が大勢いる。宗教立法を是とするいかなる動きも、良心の自由に対して幾世代にもわたり絶えず戦いを挑んできた教皇制への譲歩にほかならない。日曜遵守が、いわゆるキリスト教の制度として存続しているのは「不法の秘義」に負っており、その強制は、ローマ・カトリック主義の礎石をなす諸原理の事実上の承認となる。わが国が日曜法を制定するほどに自国の統治原則を放棄する時、プロテスタントはこの行為において教皇主義と手を結ぶことになる。それは、久しく、再び現実の専制へと躍り出る機会を熱心にうかがってきた暴政に命を吹き込み、よみがえらせることにほかならない。

宗教立法の権限を行使する国家改革運動は、十分に発達すれば、過去の時代に横行してきたのと同じ不寛容と抑圧を示すだろう。当時、人間の評議会は神の特権を僭称し、その専制的な権力のもとで良心の自由を踏みにじった。彼らの指令に背く者には、投獄、流刑、そして死が科せられた。もし教皇制またはその原理が再び立法によって権力を得るなら、大衆の誤謬に迎合して良心と真理を犠牲にすることを拒む者たちに対して、迫害の火は再び燃え上がるだろう。この悪は今や実現の瀬戸際にある。

神が私たちに、私たちの前にある危険を示す光を与えてくださったとき、それを人々に知らせるために私たちにできる限りのあらゆる努力を尽くすことを怠るなら、私たちはどうして神の御前で潔白でいられるでしょうか。私たちは、この重大な問題に何の警告もなく彼らを向き合わせたまま、満足していられるでしょうか。

私たちの前には、人間の法によって無効にされている神の律法を擁護するために、投獄や財産の喪失、さらには命そのものをも危険にさらしながら、絶え間ない闘いが続くという見通しがある。このような状況では、世俗的な方策は、平和と調和のために、国の法に対する外面的な遵守を促すだろう。そして、聖書を根拠にしてそのような方針をさえ主張する者もいる。「すべての人は、上に立つ權威に従うべきである……現にある權威は神によって定められている。」

しかし、過去の時代において神のしもべたちはどのように歩んできたであろうか。主が復活された後、弟子たちがキリスト、すなわち十字架につけられた方を宣べ伝えたとき、当局は彼らに、これ以上語ってはならない、またイエスの名によって教えるはならないと命じた。ところがペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神の御前に、あなたがたの言うことに聞き従うのが神に聞き従うよりも正しいかどうか、あなたがた自身で判断しなさい。私たちは見聞きしたことを語らないではいられないのです。」彼らはなおもキリストによる救いの福音を宣べ伝え続け、神の力がそのメッセージを証した。Testimonies, 第5巻, 711-713.

神の裁きは、アメリカ合衆国内の社会・経済・宗教の領域において、宗教指導者たちが公共道徳の復興を呼びかけ始めるための論拠を生み出すような環境を、まさに形成しようとしている。これは、1880年代と1890年代に典型化され、そして1989年に終わりの時を

画した大統領の政権期の歴史においても再び見られたものである。

「大いなる危機が神の民を待ち受けている。危機が世界を待ち受けている。」 ホワイト姉妹は二つの問いを発している。「神が私たちに、私たちの前にある危険を示す光をお与えになっているとき、それを人々に示すために、私たちにできるあらゆる努力を怠るなら、どうして私たちは神の御前で潔白でいられるだろうか。警告を与えることなく彼らをこの重大な問題に直面させることに、私たちは満足していただけるだろうか。」

これまで、私たちの前にある危険を示す光がどれほど与えられてきたでしょうか。もし光がなかったのなら、慈しみ深い神が、その警告のメッセージを一度も聞いたことのないご自分の民に、それを伝えなかった責任をどうして問うことができるでしょうか。親愛なる読者よ、あなたは、これらの記事によって示されている光に対して責任を問われることとなります。

これらの記事における、民主党の竜の権力、共和党の偽預言者の権力、教皇権、イスラム教、ラオデキアのアドベンチスト教会、さらに文字どおりのイスラエルの特性に関する具体的な記述は、体制側によってヘイトスピーチと見なされるだろうが、それらは「line upon line」という方法論によって確立された神の御言葉からのメッセージであり、その積み重ねが、神の裁きがまもなく増大し、その頻度が高まっていくことを叫び告げている。

預言的に見れば、1989年の終わりの時に至る直前の歴史において結集したクリスチャン・コアリションは、単に1880年代および1890年代との並行関係にとどまらない、より重大な適用を有している。先ほどホワイト姉妹から引用した箇所において、彼女は、サタンが世界を虜にする二つの手段の一つとして心霊主義を挙げ、さらにサタンが行う奇跡についても若干言及している。

1988年の選挙の後、すなわちクリスチャン・コアリションの登場の後、竜の領域、獣の領域、偽預言者の領域において、サタンの奇跡の著しい顕現があった。これらの現象を正しく位置づけることは重要である。なぜなら、それらは、アメリカ合衆国における間近に迫る日曜法の後に、キリストに成り代わったサタンの到来を予表しているからである。

カトリックの世界では、1990年代、いわゆる聖母マリアの出現に加え、聖人像が出血する奇跡、空に現れる幻影、雲ひとつない空から花びらが降る現象、その他の荒唐無稽なサタンの奇跡が起こり、世界はそれを目撃した。当時、これらの出来事が引き起こした妄想に取り込まれ、世界中で何千人もの人々が巡礼に赴いた。それについての本が書かれ、ジャーナリストが調査し、タイムやニューズウィークといった雑誌が表紙でこれらを取り上げた。

竜の支配領域において、インドのヒンドゥー教の像は、像の口元に置かれた、献げ物の飲料を満たしたスプーンやグラスから像が飲むというかたちで、サタンの奇跡を顕現した。インドの一つの小さな村で始まったこの現象は、エジプトの蛙の災いのように、国中へと広がった。BBCテレビのニュースはこの現象を取り上げて解説し、そして付け足しのように、テレビに出ていたBBCの記者が「明日ロンドンの博物館に行って、ヒンドゥー教の像の一つにグラス一杯の牛乳を献げたら、何が起こるだろうか」と問いかけた。翌日の夕方のニュースでは、まさに同じ記者がロンドンの博物館におり、カメラが回る中、

その大きなヒンドゥー教の像にグラス一杯の牛乳を献げた。グラスが像の唇に触れるや、牛乳は即座に像の内部へと吸い込まれた。

アメリカ・インディアンの予言に関する霊的伝承の中で、「ミラクル」として知られる白いバッファローが、1994年8月20日にウィスコンシン州ジェーンズビル近郊のデイヴ・ハイダーとヴァレリー・ハイダーの農場で誕生した。ミラクルは白い毛で生まれ、その誕生はネイティブ・アメリカンの予言の成就だと考える人々もいた。さまざまなネイティブ・アメリカンの伝統では、白いバッファローの誕生は神聖で重要な出来事とみなされ、団結、平和、そして精神的な刷新を象徴する。ミラクルは広く注目を集め、多くの人々にとって希望と精神的意義の象徴となった。白いバッファローの予言はその源流をたどると、ネイティブ・アメリカンの霊的な宗教における最も神聖な聖遺物と直接結び付けられている。というのも、白いバッファローの最初の物語の中で「ピース・パイプ」が文化に導入されたからである。

1994年、背教的プロテスタントの偽預言者の領域において、いわゆる「トロント・ブレッシング」としても知られる「ホーリー・ラフター」運動が、カナダ・オンタリオ州トロントのトロント・エアポート・ヴィンヤード教会（現キャッチ・ザ・ファイア・トロント）において同年1月に始まった。ジョン・アーノットおよびキャロル・アーノット両牧師が主導した一連のリバイバル集会のさなか、会衆の間には、制御不能の笑いの現象が、震え、泣く、倒れるといった他の顕現、あるいは動物の物まねや動物の鳴き声の模倣（しばしば「聖霊に打たれる」または「主に酔う」と称される）とともに、生じ始めた。

その笑いおよびその他の現象は、参加者たちによって聖霊の臨在と御業に帰せられ、この現象を指す語として「聖なる笑い（Holy Laughter）」という呼称が用いられるようになった。トロント・エアポート・ヴィンヤード教会におけるリバイバル集会は、世界中からの注目と来訪者を集め、この運動が他の教会や共同体へと広がるに至った。人々はその笑いを体験するために世界各地から集まり、やがて自らの所属教会に戻ると、その教会でもしばしば同様の悪霊的な現れが生じ始めた。

パット・ロバートソンは1960年にクリスチャン・ブロードキャスティング・ネットワーク（CBN）を設立した。CBNはキリスト教番組に特化した草分け的なテレビネットワークの一つで、米国におけるキリスト教放送業界の成長に重要な役割を果たした。年月を経て、CBNはテレビ、ラジオ、デジタルメディアを通じて到達範囲と影響力を拡大し、世界最大級のキリスト教系メディア組織の一つとなっている。

1988年、彼はクリスチャン・コアリションを設立し、アメリカ合衆国大統領選に出馬した。彼の信念は国家改革運動と主の日同盟にまで遡ることができる。これら二つの組織はいずれも1888年に発足し、キリスト教の原則に基づくさまざまな社会改革、たとえば禁酒、女性参政権、そして安息日（日曜日）を休息と礼拝の日として守ることを提唱した。この運動は福音派プロテスタントの影響を受け、聖書の原則に導かれる「キリスト教国家」の樹立を目指した。ロバートソンは、国家改革運動と主の日同盟の双方と同じ原則を体現していた。そのため、彼はリージェント大学も設立した。

パット・ロバートソンは1977年、ウィリアム・ミラーが大胆に反対したカトリックの教義に賛同して、リージェント大学を設立した。カトリックと背教的プロテスタンティズムは、他にもさまざまな聖化されていない実を結ぶが、その一つとして、イエスが実際に再臨する前に千年の平和があるという信念を生み出す、サタンの聖書解釈法を用いている。ロバートソンは、自身の大学が、聖書にいうミレニアムの期間中にキリストの千年にわたる統治を担う者となる男女を養成していると信じている。「regent」という語は、君主や国王が国外にいるときに、その代理または代行を務める者を意味する。

1989年の「終わりの時」に先立ち、少なくとも1960年までには、1888年に日曜立法を推進していた諸団体に対応する現代版の諸団体が、歴史の舞台に登場した。1989年以後、悪魔的な顕現が、竜・獣・偽預言者という宗教的領域の三要素すべてを揺り動かした。イエスは常に、ある事柄の終わりをその始まりと結び付けて示される。そして、ダニエル書十一章四十節の「終わりの時」である1989年は、四十一節に記される、まもなく到来する日曜法で終結する預言的期間の始まりとなる。その日曜法が到来すると、サタンはキリストに「成り代わって」現れ、奇跡と癒しを伴い、彼の欺きの頂点となる行為が始まる。

その預言的期間の始まりの歴史は、日曜法へと導く背教的プロテスタント運動の働きを指し示しており、それはその期間の始まりである1989年によって予表されていた。1989年には「鉄のカーテン」の「壁」が崩壊し、この期間の終わりには「政教分離の壁」が崩れ落ちる。この期間の始まりは、最後の八人の大統領のうち最初の二人の時期に当たる。始まりは、教皇権がソ連における無神論という敵を克服したことを示し、終わりは、教皇権が合衆国におけるプロテスタンティズムという敵を克服することを示す。始まりは、その八人のうち最初の大統領（共和党员）が聖書の預言における反キリストと手を結ぶことを指し示し、終わりは、その八人のうち最後の大統領が聖書の預言における反キリストと手を結ぶことを示す。その最初の大統領は壁を崩壊させた責任者であると理解されており、最後の大統領は壁を築く者となる。

現代の国家改革運動は、1960年に始まり、1989年の「終わりの時」に至った。選挙の後、サタンによる奇跡が始まった。日曜法の前に、国家改革派の最終的な顕現が、再び政治的に頭をもたげるであろう。日曜法の時に、サタンの驚くべき働きの時が来る。日曜法に先立ち、予言上の必然として、合衆国の国家的繁栄を奪い去る裁きが必要となるだけでなく、その裁きは、やはり予言上の必然として、理路が整えられるほどに、きわめて厳しく恐るべきものでなければならない。すなわち、最終的国家改革運動に属する者、すなわちキリスト教ナショナリストが、これらの裁きの理由を、彼らが「主の日」と呼ぶものを冒涇している市民であると特定し得るようにするためである。

次回の記事でこの研究を続けます。

もし私たちの民が、これまでのような無気力な態度を続けるなら、神は彼らに御霊を注ぐことがおできにならない。彼らは神と協力する備えができていない。彼らは状況に目覚めておらず、迫り来る危険を認識していない。いまこそ、かつてないほどに、警戒と一致協力した行動の必要を感じるべきである。

第三天使の特別な働きは、その重要性が認められてこなかった。神は、ご自分の民が、彼らが今日占めている立場よりもはるかに進んだ位置にいるべきだとお考えになっ

ていた。ところが今、行動を起こすべき時が来ているというのに、彼らはなお準備を整えなければならない。国家改革者たちが宗教の自由を制限する施策を強く求め始めたとき、私たちの指導者たちは状況に敏感であり、これらの働きかけを打ち消すために熱心に尽力すべきであった。私たちの民から光-すなわちこの時のために必要とされるまさに現在の真理-が差し控えられてきたことは、神の御旨ではない。第三天使のメッセージを伝えている私たちのすべての牧師が、そのメッセージを成り立たせているものが何であるかを本当に理解しているわけではない。国家改革運動は、ある人々によってほとんど重要性のないものと見なされ、十分に注意を払う必要はないと思われ、さらには、そうすることは第三天使のメッセージとは別個の問題に時間を割くことになることさえ感じられてきた。どうか主が、今の時のためのまさにそのメッセージをこのように解釈してきた私たちの兄弟たちをお赦しくださるよう。

今の時代の危険について、人々の警戒心を呼び覚ます必要がある。見張り人たちは眠っている。私たちは何年も遅れている。見張りの長たちは、自らを省みて用心することの緊急の必要性を痛感すべきだ。さもなければ、危険を見抜くために与えられている機会を失ってしまう。

もし、わたしたちの会議の指導的立場にある人々が今、神から彼らに送られたメッセージを受け入れず、行動のために歩調を合わせないなら、諸教会は大きな損失を被るだろう。見張りが、剣が迫るのを見てラッパを確かな音で鳴らすなら、戦列に並ぶ人々はその警告に呼応し、皆が戦いに備える機会を持つことになる。しかし、しばしば指導者はためらって立ち尽くし、あたかもこう言っているかのようなのである。「あまりに性急にならないようにしよう。誤りがあるかもしれない。誤った警報を鳴らさないよう気をつけなければならない。」まさに彼自身のためらいと優柔不断が、こう叫んでいるのだ。「平安と安全だ。取り乱すな。慌てるな。この宗教修正案の問題は必要以上に大きく扱われている。この騒ぎはやがて鎮まる。」こうして彼は事実上、神から送られたメッセージを否定し、教会を奮い立たせるために与えられた警告はその働きを果たせなくなる。見張りのラッパは確かな音を発せず、人々は戦いへの備えをしない。見張りは、自らのためらいと遅れによって魂が滅びに委ねられ、その血の責任が彼の手に問われることのないよう、よく用心せよ。

私たちは、日曜法がこの国で制定されることを長年注視してきた。いまやその動きが目前に迫っているので、私たちは問う。私たちの民はこの件において義務を果たすだろうか。宗教上の権利と特権を重んじる人々に前面に立つよう呼びかけ、旗印を高く掲げることに、私たちは力を貸すことができないのだろうか。人よりも神に従うことを選ぶ者が抑圧の手を思い知らされる時は、刻一刻と近づいている。そのとき、神の聖なる戒めが踏みにじられているのに沈黙を守り、神の栄誉を汚すことがあってよいのだろうか。

プロテスタント世界がその姿勢によってローマに譲歩しつつある今、私たちは目を覚まして情勢を正しく理解し、目の前の闘いをその真の姿において見よう。見張り人たちよ、今こそ声を上げ、この時のための現在の真理のメッセージを告げよ。私たちが預言の歴史の中でどこにいるのかを人々に示し、真のプロテスタント精神を呼び起こすことに努め、長らく享受してきた宗教の自由という特権の価値を自覚するよう、世界を目覚めさせよう。

終わりが近いゆえに、神は私たちに目を覚ますよう呼びかけておられる。過ぎゆく一時間ごとに、天の宮廷では、まもなく私たちの前に展開しようとしている偉大な光景においてこの地上の民がその役割を果たすことができるよう備える働きが進められている。私たちには取るに足らないように見えるこれらの過ぎゆく瞬間は、永遠の利害に関わる重みを帯びている。それらは、魂の運命を、永遠のいのちへか永遠の死へかと形づくっている。今日、人々の耳に語る私たちのことば、私たちが行っている行い、私たちが担っているメッセージの精神は、命に至る香りともなり、死に至る香りともなる。

兄弟たちよ、あなたがた自身の救いが、そしてまた他の魂の運命も、私たちの前にある試練に対してあなたがたが今行っている備えにかかっていることを、自覚しているだろうか。反対があなたがたに向けられるときに堅く立つことを可能にする、その激しい熱心、敬虔さ、献身を、あなたがたは持っているだろうか。もし神がかつて私を通して語られたことがあるなら、あなたがたが評議会の前に引き出され、あなたがたが堅持している真理のあらゆる立場が厳しく批判される時が来るであろう。いま多くの人々が無駄にしているその時間は、迫り来る危機に備えるという、神が私たちに与えておられる使命に捧げられるべきである。『証言』第5巻、714-716頁。